

二〇二〇年度 第二回入学試験問題

国語 (五十分)

この冊子さつしには、

文章一

文章二

の二つの文章があります。

文章一

1

朝露あさつゆきらめく草むらに、青く澄すんだ水の色。つかの間の幸せな夢の中で、ツユクサが瞳ひとみを輝かがやかせている。

道端みちばたや空き地に咲くツユクサ科の一年草。名は露草。夏から秋の早朝、露の雫しずくをきらめかせた葉の間から青い花が咲き出たかと思うと、朝露が消える頃にはもうしぼむ。ありふれた雑草ながら、美しくも短い命の花は、はかない露の精を思わせる。

比類なく美しい青は、色素のアントシアニンにマグネシウムが結びつくことよって生じてくる。花びらの絞り汁は昔から染色に使われたが、光や水に弱いことから、藍染めの技法が伝わりとしだいに廃れた。

しかし一方で、水で洗うと跡形もなく流れて消える特性は、友禅染めの下絵を描くには好都合だった。早朝に花を摘み、その絞り汁を和紙に染み込ませて乾燥させたものが「青花紙」で、近江国（現在の滋賀県）の特産物として今日もなお生産されている。この用途のために品種改良されたものがオオボウシバナ（大帽子花）で、花びらがツユクサの3倍ほどもあり、観賞用に栽培されることもある。とても美しいが、残念

2

なことに命のはかなさはツユクサと変わらない。

名の由来として、花の命が短くて朝露が残るうちにだけ咲くからとも、露を帯びて咲くからともいう。早朝のツユクサの葉は露の雫をきらきらと輝かせ、その光の反射が花の青さと相まって、なおいつその風情を醸し出す。

露の雫は、どのようにして生まれたのだろうか。ツユクサに限らず、冷え込んだ朝の草むらはしつとりと朝露を帯びている。これは夜間に気温が下がり、空中の水蒸気が冷えてできる露（結露）である。

一方、一般に植物の葉は、昼の間は裏面の気孔から根が吸い上げた水分を水蒸気として蒸散させている。そうすることで、水を葉の隅々までいきわたらせることができる。夜になると気孔が閉じて蒸散作用は弱まるが、なおも根は水を吸い上げるため、葉の内部に水が溜まる。この余分な水は葉脈の末端にある水孔という穴から外に押し出され、水滴となって滴り落ちるのである。そこで、朝になるとまるでシャヤンデリアのように、葉の先端に露の玉がきらめくのだ。

3

花は、ちようど2枚貝のようにたたまれた包葉（苞ともいう。花に付随した特殊な形の葉）の間から、毎朝ひとつずつ（まれに2つ）顔を出す。

花びらは3枚。ミッキーマウスの耳のような形に広がる2枚が大きくて青く、下の1枚はごく小さくて白い。

雄しべは6本。2本の雄しべは雌しべとともに長く前方に突き出されているが、茶色であり目立たない。短い3本の葯(花粉袋)はX字型をしており、花の中心で黄色く目立つ。そして残る1本は両者の中間の位置にあり、Y字型で、色も黄と茶の間だ。

花の多くは雌しべと雄しべの双方をもつ両性花だが、中には雌しべを欠く雄花も混じっている。両性花が実を結ぶには多量のエネルギーを費やすが、雄花が花粉をつくるだけなら少量ですむ。エネルギーを節約し、花粉をばらまいてあわよくば父親として子孫を残そうとする花のたくらみだ。

ところで、目立つ3本の短い雄しべは、実際は花粉をほとんどつくらない。ほんの少し出す花粉は中味が空っぽの偽物だ。虫を誘うための「飾り雄しべ」(仮雄しべ、仮雄蕊とも呼ぶ)なのである。花粉を出す役割は長くて地味な雄しべが請け負っている。中間の雄しべも花粉を少し出し、長い雄しべとともに、目立つ飾り雄しべに口を伸ばす虫のおなかに花粉をそっとつける。

一般に、花を訪れる虫は、蜜と同時に花粉を食糧として利用する。植物によっては蜜をつくらず、虫に花粉だけを提供している種類もある。しかし花にしてみれば、花粉には卵細胞に精核を送り込んで子をつくるという重要な任務があるので、多量に食べられてしまつては困る。花粉の製造には貴重

4

なタンパク質や核酸を要するので、コストの面でももったいないのだ。

そこでツユクサは「飾り雄しべ」を用意し、たんまり花粉があると見せかけて虫を誘う。騙された虫が長い雄しべや中間の雄しべの花粉に触れて次の花の雌しべに運んだとき、花は目的を成就する。

ツユクサの花は、短い命が終わりに近づく頃、ひそかに大仕事を果たす。花は、しばみながら長い雄しべと雌しべをくるくると巻き上げ、絡み合わせて自ら受粉するのだ。同じ花の花粉で受粉することを同花受粉という。朝の短時間に虫が来るとは限らないが、こうして同花受粉を行うことで確実に実を結ぶことができる。

同花受粉は、しかし極端な近親交配となり、変異の幅を狭めると同時に、遺伝的に劣った弱い子孫が生まれる危険をはらむ。が、冬は枯れる一年草のツユクサとしては、なにがなんでも種子をつくらなければ子孫が絶えてしまう。その執念が生んだ最期の秘め技が、巻き上がる雄しべと雌しべなのである。

(多田多恵子『したたかな植物たち 春夏篇』ちくま文庫より)

文章二

翌日の土曜日は、はつきりしない曇り空だった。FCレックの練習は午後からなので、午前中は自分の部屋でごろごろしてスマホをいじっていた。何かに没頭して、柴山コーチから言われたキャプテンマークのことを頭から追い出したかった。

「あら、スマホはリビングでだけの約束でしょ」

母さんが部屋をのぞいてきた。

「だって、父さんがソファ陣取ってるから、場所ない」

ふだんは何か話しかけられても言いよどむのに、口答えだけは **A** と滑らかに出る。父さんは録りだめしたスポーツ番組を朝早くから夢中になって見ていた。

「そうね。今だけよ」

母さんは苦笑いして、部屋から遠ざかった。

こうやってスマホで暇をつぶしていると、スマホを持っていかなかったときは、いったい何をやっていたのかな、と思うことがある。よく考えればつい一年くらい前のことなのだが。

周斗が通う橘中のサッカー部の連中も午後から練習なのか、午前中は近くの公園で遊んでいるらしい。別に知りたく

もない情報なのだが、友だちと遊んでいる様子をいちいちSNSにアップしてくる輩がいる。見なければいいのに、つい気になって見てしまう。

『サッカー部。意外と楽しいドッチボール』

大勢のサッカー部員がたわむれている写真の端っこには、しゃいだ顔の慧介が写っているのを見つけて、なんか **B** する。みなみのキッカーズでは真面目で地味な選手だった。

慧介、小学生の頃はこんなに満面の笑み見せてたっけ？

サッカー部ではじめて、キヤラ変したのか？

B の原因はつきとめたたくない。軽い嫉妬？ それとも羨望？ 疎外感？

自分の気持ちをそういう言葉にあてはめたくないし、絶対に認めたくない。

俺はクラブチームで、もっと真面目にサッカーをやっているんだ。お前らみたいに **C** やってない。お前らとは違うんだ。

部活は部活で真剣にサッカーに取り組んでいるはずなのだが、勝手にそう心に言い聞かせ、 **B** にふたをした。

練習開始時間が近づくと、FCレックのメンバーがグラウンドに三々五々集まってきた。柴山コーチは姿を現すと、す

ぐに集合をかけた。二十一名の選手たちが二重になって、柴山コーチの前に座った。曇り空からときおり顔を出す太陽で、柴山コーチの影が深緑の人工芝しんしに、浮うかんだり消えたりした。「昨日話した通り、今日からU-14が始まる」

柴山コーチの熱のこもった口調に、選手たちの顔がいつになく引き締しまった。

「去年はよい結果を残せなかったが、このチームはもつとけるはずだ。まずは初心にかえろう。選手ひとりひとりが、^③わざわざFCレックというクラブチームに入って、何のため

にサッカーをやっているのか、もう一度よく考えてみる」
空気がしんと静まりかえった。選手たちは、目を軽く閉じたり宙をにらんだりしている。周斗はスパイクの足先に視線を落とした。

もつとうまくなりたくて、クラブチームに入った。FCレックを選んだのは、自分の実力で入れそうだったところと、自力で通えるという家の都合だ。

思考を打ち切るように、柴山コーチが口を開いた。

「それぞれいろんな理由があったり、動機があるはずだ。入団するときにも言ったことだが、FCレックが目指しているのは、サッカーというスポーツの競技選手を育てること、つまり、技術をみがき上げることです。ユース世代といった、次のステージにつなげていくことだ」

周斗はぐくりとつばを飲みこんだ。

次のステージとか、そこまで大それたことは考えていなかったかも知れないけど、じゅんぱい純粹にもつとうまくなり、と思っていたのは確かなことだ。

「中学の部活なら、もちろん勝つことを目指して練習するのだろうが、仲間との協調性を身につけることや、せんぱい先輩、後輩との縦のつながりから学ぶことなど、目的は他にもあるだろう。でも、ここは中学の部活ではない。ここでは、個々の選手の技術を極限まで上げて、勝つ、という結果を出すことが重要なんだ」

一呼吸置いてから発せられた「勝つ」という言葉は、周斗の鼓膜こまくをつんと刺さした。弱小クラブチームであることを忘れさせられるほど、力強い言葉だった。

うがった見方をすれば、柴山コーチもボランテアでコーチをしているわけではなく、きちんと結果を出さなければ自分の立場も危うい。それに、クラブチーム自体の将来に関わってくるという事情もあるだろう。

でも、コーチも選手も勝ちたくない人などいない。

勝ちたい。その思いは決してぶれてはいない。

^④負け癖くせのついてしまったチームで、ともすればゆる緩みがちな空気がきりきりと絞しぼられていった。隣となりに座っている克彦かつひこも身を乗り出している。

周斗の胸も発熱しだした。脈が元気よく打ち始める。そうだ、勝ちたい。勝って、強いチームになりたい。

柴山コーチが話を続けた。

「まあ、前置きはこのへんにしといて。今年度の体制についての話に移ろう。まずは、キャプテンだが」

反射的に背筋がしゅつと伸びた。ずっと頭から離れなかったキャプテンマークのことを一瞬忘れていたのに、すぐに引き戻された。

「キャプテンは、」

耳の奥がきんとした。

「大地をお願いしたい」

背筋は伸びきったまま、制止した。息も止まった。周りがかすかにざわついた。そのざわつきを抑えるように、

「はい！」

威勢のよい声が、後ろからまっすぐ飛んできた。

「よし。大地、頼んだぞ」

柴山コーチが深くうなずいた。見えるはずもないのに、後ろの大地も呼応するようにうなずくのが、頭の中にリアルに浮かんだ。

「春のリーグ戦では、決勝トーナメント進出を狙うぞ」

柴山コーチが息巻くと、選手全員の声が「はい」とそろった。周斗は声を出しそびれて、遅れて口パクをした。

そのあと、コーチはフォーメーションの確認をすると、具体的な戦術の説明に入った。

「せまいゾーンでプレーしてしまうことがよくあるが、そんなとき一気にサイドを変えてみる。つまりサイドチェンジだ。これが使えらると、攻撃の幅がぐんと広がる。みんな頭では分かっているとは思うけど、案外試合で使えてないよな」

選手たちが、こくこくうなずいている。

「短いパスを繰り返して、敵を片サイドに引きつけておいて、一気に逆サイドにロングパスを出す。特にゴール前でのサイドチェンジは……」

顔は柴山コーチの方に向けていた。熱心に耳を傾けているふりをした。でも、コーチングの声はだんだん遠ざかっていった。

何で大地なんだよ。まだあいつ、このチームに来て一ヶ月じゃないか。

勝つためには、俺がキャプテンじゃダメだったことなのか？ 俺がキャプテンだったから、今まで勝てなかったのか？ 少なくともコーチは、俺より大地がキャプテンをやった方が勝てると思ってるのか……。

首がうなだれないようにだけ注意した。注意していないと、

重力にぐっと引つ張られてしまいそうだった。重たい頭をいつも当然のように支えている細い首が、今はとても頑張^{がんば}って、懸命^{けんめい}にこらえている。

——キャプテンは、大地

と発表されたとき、隣に座っていた克彦が思わず周斗の方を向いた。必死で何食わぬ顔を作った。

「……じゃ、始め！」

柴山コーチがパンと両手を打った。選手たちが、わっとはじた。途中^{とちゅう}から話を全く聞いていなかった周斗は、遅れて立ち上がると首を左右に細かく振^ふった。

「今日はパス練からだって」

後ろから声をかけられて振り向くと、大地が立っていた。

「お、おう」

思わず目をそらせた。今日、一番組みたくない相手なのに、完全に出遅れてしまって、みんなもうペアを組んでパス練習を始めていた。周斗がなかなか動かないので、大地はその場でリフティングを始めた。

ときおり、ヘディングをまぜたり、胸でトラップしたりしても、ボールが地面に落ちる気配はまるでなかった。きつと止めようと思うまで、何千回でも続けられるのだろう。

「おい、大地と周斗」

柴山コーチが近寄って来た。大地はボールを少し高めに

蹴^けって、両手でキャッチした。

「お前らふたりはこのチームの要だ。ミッドフィルダーの大地とフォワードの周斗で攻撃の基盤^{きばん}を作ってくれ。がんばん
いってくれよ。期待しているぞ」

「ハイッ」

D の声だけが響^{ひび}いた。催促^{さいそく}するかのようになり、柴山コー

チが E の方^{かた}にあごを突き出した。F は仕方なく、返事の代わりに小さくうなずいた。

「そうだ、周斗。キャプテンマーク、あとで大地にわたしと
いってくれ」

柴山コーチは周斗の浮かない様子など、全く意^いに介^{かい}すことなく事務的に伝えると、その場を離れた。

「そろそろ、やろうよ」

大地は片手でボールを胸^{むね}に抱^{かか}え込んだ。動き出さない周斗にしびれを切らしたのだろうが、口調はいたって穏^{おだ}やかだ。涼^{すず}しげな目元はびくりとも動かない。

もし逆^{さか}だったら、周斗だったら、顔にも口調にも態度にも全てにイライラを出して「早くしろ」とせつついていたに違^{ちが}いない。

「その前にわたしとく」

「何を？」

大地が首を少し傾けた。

⑤「さーとらしいんだよ。」

心の中で毒づきながら、リュックの置いてあるベンチに大股で近づいた。後ろから大地がついて来ているのが分かる。

リュックの内ポケットにしまっておいたキャプテンマークを取り出した。黄色いキャプテンマークは、いつもと変わらず鮮やかだった。

こないだの試合のときまで、左腕に当たり前のようにはめていたキャプテンマーク。まさかこれを人に手わたすときが来るとはつゆほども思わなかった。

実は昨夜、こっそり部屋ではめた。そんなことは誰も知らないよしもない。

手わたすのに一瞬躊躇したが、未練がましく思われたくない。周斗は大地に向かって突きだした。

「あ、ありがと。帰りのときで良かったのに」

そう言いながら大地は、自然と上がってきてしまう口角を必死で抑えている。クールな目元もふつと緩んだ。それを見た瞬間、怒りが猛然と腹の奥から這い上がってきた。

大地に対して怒る筋合いがまるで無いのは、理性では分かっている。だけど、このマグマのように噴出してくるとどろとした熱い感情は、悔しさというより、説明のつかない怒りだった。

「早くパス練やろうぜ」

今度は周斗がせっついた。理不尽にも怒った口調になった。それなのに大地は、

「ごめん、ちよつと待って」

と、キャプテンマークを名残惜しそうに眺めると、やっと自分のリュックに丁寧にしまった。リュックのファスナーが閉められると、周斗の胸もファスナーに挟まれたみたいに、しくつと傷んだ。

他のメンバーがとつくにパス練を始めていたので、周斗と大地はコートの方まで行かなくてはいけなかった。柴山コーチがちらちら見ていたので、小走りで向かった。

「シュウトってどういう字？」

大地が唐突に聞いてきた。

「えっ？」

眉間にしわが寄った。

「シュウトって、シュ——トじゃん。かつこいいよね」

「そっかな」

ぶつきらばうな返事にも、大地はめげずに繰り返した。

「で、どういう字？」

「円周率の周に北斗七星の斗」

いつも漢字を説明するときを使う決まり文句を、早口言葉みたいに猛スピードで言った。

「ええつと、円周率の周に……」

頭の中で文字をなぞりだした大地の思考を切るように、周斗は斜めにあごをしやくつて、逆サイドに行くよううながした。大地はあわてて反対側に駆けだした。みんなは短いパスからロングパスの練習に移っていた。

大地が定位置についてこちらを振り向く前に、周斗はボールを蹴り出した。しかも正面ではなくボールは派手にずれていた。半分わざとだった。

大地は振り向きざま、すでにボールが蹴られていたことに少し驚いた様子だったが、すぐに反応してダッシュした。あつという間にボールに回り込むと、ダイレクトに蹴り返した。芯をとらえたキレのいいボールが返ってきた。

周斗は微動だにしなかった。大地の蹴ったボールは少しもぶれることなく、驚くべき正確さで周斗のもとに返ってきたのだ。

んっ、と息を呑む音が自分の内側で聞こえた。

思い返せば、大地とヘアを組んだのは、今日が初めてだった。

今のは、まぐれだよな。

動揺してボールをしばらく止めてしまった。周斗は慎重に大地の正面を狙って打ち込んだ。今度は大地も横に一、二歩ずれるくらいだった。それを大地は、またダイレクトに返してきた。

このボールも周斗の真正面だった。胸がドクンとした。周斗もダイレクトで蹴り返してみたが、焦ったのか芯でとらえることが出来ず、ボテボテの情けないボールが転がった。

ゆるいボールに突っ込むように走ってきた大地は、ビシッと勢いをつけて蹴り出した。周斗はトラップに失敗し、ボールは右後ろに大きく跳ねた。周斗のミスなのに大地は、

「ゴメン」

と、片手を上げた。

あやまんなよ！

頭の皮がちりちりした。

何度繰り返しても、大地が蹴り出す全てのボールは、完璧にコントロールされていた。寒くもないのに、背中がすうすうした。

今まで、決してあんのんと練習していたわけではない。でも、クラブチームのキャプテンというだけで、いい気になっていたのだろうか。

結局、弱小チームの「お山の大将」だっただけじゃないのか。

しかも、そのキャプテンの座すら、奪われてしまったのだ。ロングパスの練習が終わって、「鳥かご」と呼ばれるパス回しのトレーニング、ドリブルからのシュート練習やミニゲームに進んでも、周斗はプレーに全く集中出来ずにいた。

気持ちの切り替えが出来ない。頭に浮かんでしまった「お山の大将」という言葉が、回遊魚のように頭をぐるぐると回り続けた。

業を煮やした柴山コーチが、

「周斗、お前耳あるのか！」

G を使ってみろって言う

ただらうが！」

つばを飛ばして怒鳴った。激しい剣幕に体はビクツと反応するのだが、^⑦それでも心は全くついていかなかった。

(佐藤いつ子『キャプテンマークと銭湯と』角川書店より)

国語(一)

受験番号

氏名

一枚目	<input type="text"/>
二枚目	<input type="text"/>
合計	<input type="text"/>

一、次の——線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 中学校の <u>カテイ</u> を終える。 | 2 <u>キヨウリ</u> に帰る。 |
| 3 <u>チヨメイ</u> な作家。 | 4 自分自身を <u>ナイセイ</u> する。 |
| 5 勇気を <u>フル</u> う。 | 6 山頂で <u>ライコウ</u> をおがむ。 |
| 7 <u>ケイトウ</u> 的に説明する。 | 8 人類の <u>キゲン</u> を探る。 |

二、別冊の「文章一」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一 ——線①「ツクサが瞳を輝かせている」について

- (1) ここで用いられている表現技法として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、倒置法 イ、対句法 ウ、擬人法 エ、体言止め

- (2) 「ツクサ」と呼ばれる理由が説明されている一文を文章中から探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問二 ——線②「水に弱い」とありますが、この特徴はどんなことに利用されましたか。解答らんには合うように、五字以上十字以内で文章の中から探し、抜き出して答えなさい。

問三 ——線③「葉の先端に露の玉がきらめく」とありますが、「葉の先端」に「露の玉」がつく仕組みを文章中の言葉を用いて説明しなさい。

問四 「ツクサ」の三種類の雄しべについて次の表にまとめました。**3**の内容をふまえて、各問いに答えなさい。

	雄しべ①	「A」本	長い	「D」	出す	花粉
雄しべ②	3本	「C」・X字型	黄	「F」		
雄しべ③	「B」本	Y字型	「E」	「G」		
	本数	長さ・形	色			

(1) 空らん「A」、「B」に当てはまる数字をそれぞれ答えなさい。

A B

(2) 空らん「C」・「G」に当てはまる語句の組み合わせとして正しいものを次のア～カの中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | |
|------------|---------|--------------------------|
| ア、C 短い | F 偽物を出す | <input type="checkbox"/> |
| イ、C 中間 | F 出す | <input type="checkbox"/> |
| ウ、D 黄と茶の中間 | F 少し出す | |
| エ、D 茶 | G 少し出す | |
| オ、E 黄と茶の中間 | G 偽物を出す | |
| カ、E 黄 | G 少し出す | |

問五 ——線④「最期の秘め技」について

(1) 「最期の秘め技」の言い換えにあたる四字の表現を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

(2) 「最期の秘め技」の利点と欠点を、それぞれ一文にまとめて答えなさい。

利点	<input type="text"/>
欠点	<input type="text"/>

国語(二)

受験番号			

氏名

三、別冊の「文章二」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一——線①「F C レック」とありますが、「周斗」が「F C レック」に入ったのはなぜですか。その理由が述べられている形式段落を探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問二 空らん 、、 に入る最もふさわしい言葉を次のア～クの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、キラキラ イ、するする ウ、せかせか エ、ワクワク
- オ、ぐるぐる カ、もやもや キ、くるくる ク、チャラチャラ

A	B	C
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

問三——線②「三々五々」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、ちらほらと イ、仲良く ウ、急いで エ、いっせいに

問四——線③「わざわざF C レックというクラブチームに入って、何のためにサッカーをやっているのか、もう一度よく考えてみる」とありますが、柴山コーチが考える「クラブチーム」と「部活」のちがいについて、文章中の言葉を用いて説明しなさい。

問五——線④「負け癖のついてしまったチーム」とほぼ同じ意味で使われている十字以内の表現をこれより前の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問六 空らん 、、 に入る人物名の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、D 周斗 E 大地 F 周斗
- イ、D 柴山コーチ E 周斗 F 大地
- ウ、D 大地 E 大地 F 周斗
- エ、D 大地 E 周斗 F 周斗

問七——線⑤「ざーとらしいんだよ」について

(1) 「ざーとらしい」とは、「いかにも意識して行ったようで不自然である」という意味の言葉をくずした言い方です。これをくずす前の形に戻し、ひらがな六字で答えなさい。

(2) 「ざーとらしいんだよ」とは、どんなことに対してだれがどのように反応したことへの感想ですか。説明しなさい。

問八——線⑥「寒くもないのに、背中がすうすうした」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、練習を始めたたら急に体調が悪くなったため。
- イ、蹴り返されたボールの速さが怖いと感じたため。
- ウ、大地のサッカーの技術の高さに圧倒されたため。
- エ、初めて大地とペアを組んで緊張しているため。

問九 空らん に当てはまる言葉を、これより前の「柴山コーチ」のセリフの中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問十——線⑦「それでも心は全くついていかなかった」とありますが、この時の「周斗」の気持ちの説明として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、「あいつ」さえチームに入ってこなければよかったのにと大地をにくんでいる。
- イ、なんで「あいつ」ではなく自分を選んでくれないのかとコーチをうらんでいる。
- ウ、どんなに練習しても思う通りには動けず技術が下がっていく自分にいらだっている。
- エ、キャプテンという立場にあまえていたかもしれない自分に気づき落ちこんでいる。
- オ、楽しそうに活動している中学校の部活に入らなかったことを後悔している。